

『源氏物語』 主題論予備考説

—— 帚木卷 「雨夜の品定め」 女性論の主題性について

武 原 弘

『源氏物語』の主題はなにか。この物語の本質を見きわめるべく設けられるこの課題の前に、これまで多くの先学諸賢による考論が重ねられてきた。が、あらゆる批判に超越してゆるがない定説とされるべき、明確な解答はいまだ見られないと言える。およそ一定の帰結は得られそうもない『源氏物語』主題論の多様さ、困難さとは、いったい何に因由しているのか。まずはこの問題から考察をはじめることにする。

右について考慮される原因の第一は、『源氏物語』がはなはだ複雑な構造を示す大長篇作品である点にある。この物語は、基本的に三部構成によると読み定められてもはや動かないにしても、各部を構成する巻々の承接関係、ストーリーの展開過程その他について、ややもすれば非連続、不整合の相が見られ、特に第一部の物語においてそうした傾向が顕著とされている。そこに非連続の連続なる文芸形象を読みとるべきとする主^張もなされるのであるが、むしろこの物語の成立過程上の問題の介在を指摘する立場からの論^がが説得的で、ひつきょう、物語全篇を貫く明確な主題の把握まで、解明

を得るべきあまりに多大の課題が認められる。

原因の第二は、この物語における主題形成のあり方にある。『源氏物語』の全篇を一貫する、統一的な思想あるいはモチーフが、はじめから予定調和的にあつたとは到底読まれず、場面の展開や構想の進展に伴いつつ主題は徐々に、多様に生成発展していったものと読んで肯んぜられるのである。この点について、つとに江洲文也氏は論じている。

作品の主題はこれこそ今日の言葉でいう弁証法的に自己運動性^を持った展開の原動力を内に蔵していたと認めてよいであろう。^注

あるいはまた、長谷川政春氏によつても

源氏物語は書き継がれてゆく中で、次から次へと主題が紡ぎ出されて、発展あるいは深化している作品である。^注

とされる。他にも同趣の考論は多い。そうした発展体をトータルに把握^しえることは、言うべくして容易な作業ではないはずである。

さらに、より根本的とも考えられる第三の原因は、主題論の方法についての問いなおしである。従来、主題とは作品を貫く作者の創

作意図ないしは思想という実体を予想して考えられ、それは作品としての虚構世界の最深基層にひそめられて在るものであった。が、近時に積極的に行われつつある構造主義理論では、物語研究において「作者の死」「読者の誕生」^{注5}がその基礎に前提されるので、「源氏物語」作者紫式部の創作意図、思想などについての考察は、主題論の視座から捨象され、ひきかえに重要視されるのは読者（さしあたっては論者）の立場である。その読み手がこの物語をどう読むか、その読みがそのまま主題論の内実をなす。重ねて長谷川氏に学ぶならば、

「主題」を作家の側のみ限定することなく、いわば読者の側から掘り起こされてゆくもの、

と考えるのである。こうしたいわば読者論に立つ主題論は、当然のごとく、さまざまな読者による独自にして多様な主題論として認められることになる。秋山虔氏の説くとおり、

『源氏』の成立の同時代から現在まで『源氏』がどう読まれてきたか、すなわち『源氏』の主題は幾変転を重ねてきたが、そのことは個人の読みにおいても断断であろう。彼の年輪とともに『源氏』の主題は動く。

のである。

ここで、小論がいつその考慮をはらっておきたい問題がある。

このような読者の側に立つてする主題論は、読者各人の立場や状況、体験や思索の重ね読みを通して多様かつ個性的になされるのであるが、同時に避けがたく主観的ひいては独断的傾向につくものとならないであろうか。『源氏物語』主題論の代表例「もののあはれ」

論でさえ、百川敬仁氏によれば、当時の時代・社会との関わりのかで、宣長に相当の、かなりにイデオロギッシュな「作品」読みの所産であるらしい。そしてそのことは、主題論の現在において批判し、克服されるべき切実な課題なのであることも知らされているのである。

いかにすれば偏狭な読者主義とも呼ぶべき主観的、恣意的主題論を超えて、より確かな、より全うな主題論の地平は拓かれてくるのか。前引の秋山論文のなかで、『源氏物語』をどう読むか、とはいえ私の読みは常に動いている」と肯んずる氏こそ、あるべき本来の『源氏』主題研究の方法論から実践まであくなき考究を続けてきている一人であり、かく述べつつなされる氏の主題論の確かな説得性、共通の理解、同意の得られやすさのゆえんが学ばれなくてはならないだろう。かねて氏が強調してきたところ、『源氏』主題論にせよ、人物論にせよ、その方法としての肝要事は、それがあくまでも作品の「文体」（「文脈」「表現」とも）に密着して「物語の論理」の必然を読み明かす作業として行われなくてはならないということである。それは、自ら構造論にも及ぶところであろう。いずれもが、さわまるどころ「作品論」なのである。このような氏の主題論は、方法として作者の側にのみ立つものではなく、あるいは読者の側のみ立つものでもない。あえて言うなら作品そのものの側に立つ主題論なのである。たしかに、阿部好臣氏が説くように、作品への読みが、作者の精神や状況にいつのまにかすりかえられている（中略）その先に主題がみえてこない。^{注10}

とする主題論の困難さ、危うさは、ややもすれば付きまとうのかも

知れない。が、作品論としての主題論は、こうした困難をよく超克するものと確信されるのである。なぜなら、主題論は、もともと文学作品が作者と読者双方の関係営みのうちに生成結果するものであるその本源性に立脚し、したがって作者論と読者論のいずれか一方に偏することなく、それらを統合止揚する新たな位相において行われるものだからである。端的に、作者のいない文学作品は存在せず、また読者のいないそれも存在することはない。文学作品の成立は、両者の存在を契機にはじめて可能なのであるから、その主題論の可能性もその点に求められて当然であろう。

かくて、作品そのものの側に立つ主題論のあり方について、その要諦を確認することができた。次節において、その具体論を試みたい。テーマを絞って、帯木卷「雨夜の品定め」女性論の主題性についての考察とする。

二

「雨夜の品定め」の主題性とは何か。すなわち挿話としてはやや長大な、込み入った女性論談義の物語をどう読み解くか。いまさらながらの内容要約ではあるが、物語の要点は、光源氏を中心とする、いづれ劣らぬ好色の朋輩四人の男性が、妻と選びたい理想の女性像について議論するその場面の終始において、中の品の女性が話題の中心に据えられるというものである。議論展開の基本は、一般論、比喻論、体験論の順を追う形で進行している。この「品定め」女性論の物語場面について、諸先学の論解に学びつつ小論をすすめてよう。まず想起されるのは、はやく藤岡作太郎氏が説いたところ

源氏物語の本意は実に婦人の評論にあり。(中略) 雨夜の品定めが源氏一篇の総評ともいふべきは論なし。^(注1)

理想の女紫の上ほかの女性人物それぞれの性格描写を通して、作者紫式部が「自己の婦人観を発表せり」との論断である。さらに、島津久基氏によっても同趣の講解がなされ、

源氏の作者は物語の中で作中の人物の口を通して時々諸種の論評を試みる。(中略) 此の品定め(注2)の所論が、以後婦人の大切な

庭訓として遵奉せられ依拠せられるに至った社会的価値の大なるも説かれた。「品定め」に作者自身のまとまった「婦人論・女性観」を読んだの所説である。

こうした従来の見解に対し、阿部秋生氏は趣旨を異にする考論を提示した。「品定め」の女性論が法華経の三周説法の型を借りて行われているとの「花鳥余情」説を重視して、

この品定めが、源氏のために説いたものであって、単なる一般論を作者が試みたといふ性質のものではない(中略)、ここに「雨夜の品定め」をおいたのは、作者の独自の女性評論を披瀝するためではなくして、かうした通念的な、しかも好色者達の女性観が、主人公の源氏にどう作用し、源氏がどう反応するかを語ることであった

とし、これに触発された源氏の中の品の女性に対する好色心によって、以降のいわゆる帯木十六帖の物語が始発、構成されることを論解した。重ねて氏説を引用すれば

作者は、物語を構成する必要からこの場面を設けたもので(中略)、この十六帖が、「雨夜の品定め」を冒頭に据えた一連の物語

であることは明白とする。^{注15)}

いま、阿部氏説に学ぶ二つの要点に留意しておきたい。その一は、「雨夜の品定め」女性論が作者の女性観を語るうとするものではなく、物語のプロット上必要とされて語られたものであること。その二は、その主題性は作中の限定された範囲（帚木）三帖あるいはこれを含む玉鬘系十六帖）の物語にのみ有効に作用しているものであること。作品の文脈、構造に即して読むに、二点とも肯んぜられるところであるとし、これを承認、支持する後の論者は多い。^{注16)}しかし、他方において阿部氏説とは大異の論を主張する立場もあるもので、いま瞥見しておきたい。

すではやく、『細流抄』が「桐つほ巻は序分までもいりた、す此巻物語の序分也」と注記したごとくに、この「雨夜の品定め」は物語全篇の総序としても読まれてきた。『岷江入楚』、『源氏物語新釈（真測）』などを経て、現代においてもその読みは継承されている。西郷信綱氏の説論についてみれば、

雨夜の品定めはこうしてたんに一場の気紛れな議論であるどころか、その射程は全篇に及んでいるのであり、それを「帚木」「空蟬」「夕顔」三帖のことに狭く限ろうとする見解には従いたい。^{注16)}

との論断を知る。あるいは近時に鈴木一雄氏が論ずるに、「品定め」の女性論は

それ自体が一つの主張と価値を持ち、『源氏物語』全体の精神的基底として潜み、流れ、全篇を貫いていく

とされる。ただし、それが

そのまま作者の抱懐する婦人観、女性観であると言えるであろうか。

と、従来の総序説を批判的に受けとめた上での考論で、^{注17)}鈴木氏説にやや先じてなされた日向一雅氏説

おそらく「品定め」の女性論は作者にとつて持続的な問いであったのであり、みずからの物語創作のために作者はこの問いをくり返し問い直した^{注18)}

が重視されている。物語の構成、展開上の意義を認めた上での総序説と言える。

さて、いわば作品論に立つ主題論をめざす小論の立場で、「品定め」女性論をどう読み解くか。具体的に物語本文に即しての分析作業にたずさわつてみたい。

「品定め」女性論の前文「帚木巻冒頭文は、周知のとおり、後の夕顔巻末尾文と明らか首尾照応関係にある草子地文で、常套法ながら、ここでも再読しなくてはならない。

光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさま。さるは、いといたく世を憚りまめだちたまひけるほど、（下略）（帚木、(1)―(五三頁)）

かやうにくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくてみなもらしとどめたるを、など帝の皇子ならん

からに、見ん人さへかたほならずものほめがちになると、作り事
めきてとりなす人もしたまひければなん。あまりもの言ひさ
がなき罪避りどころなく。(夕顔、(1)一九五—一九六頁)

右の叙述によつて、「帚木」「空蟬」「夕顔」三帖が作者(語り手)
によつて一括りの物語としてまとめられたものであることは疑義を
いれないところで、作品構造上のたしかな枠組みであると読まれる。
その枠組みのなかの基礎に位置づけられる「品定め」女性論であつ
てみれば、その射程は自ら右三帖に限定されてくるものと考えられ
よう。細部叙述に即して読めば、「かかるとすき事」「軽びたる名」

「忍びたまひける隠るへごと」とは、さしあたっては人物空蟬、夕
顔との色恋沙汰を指して言つており、あるいは「かやうのくだくだ
しき」「あながちに隠ろへ忍びたまひし」それなのである。「品定め」
女性論は、明らかに彼女たち二人の物語への登場を導く下準備で
あつた。さらに、この三帖の物語の付加延長上に語られていること
が明らかで、人物末摘花、玉鬘の物語を併せ見ても、さきに触れた
阿部説のとおり、作品構成上の基本骨格は変わらないし、その主題
性の面でも一貫性が確認され得るのである。すなわち、右のいずれ
の女性人物も「中の品」に評定されるころの没落貴族の出自にあ
り、

もとはやむごとなき筋なれど、世に経るたづき少なく、時世に
うつろひておほえ衰へぬれば、心は心として事足らず、(下略)

(帚木、(1)一五九頁)

しかも、その性格はそれぞれに個性的で、

人の心々おのがじしの立てたるおもむきも見えて、(中略)今は、

ただ、品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、(中略)ただ
ひとへにもまめやかに静かなる心のおもむきならむ(同、(1)
五八—六五頁)

男たちの理想によくかなつた、すぐれた人格の持ち主なのであつた。
ひつきようするに、「品定め」における中の品の女性推奨論は、い
わゆる玉鬘系十七帖の物語を構成するその序分に位置づけられ、そ
の議論内容に沿つて源氏に引き合わせられる、中・下層のそれぞれ
の境遇や状況また思念や生き方を一身に負いきる主体存在として
のヒロインたちの登場を用意して語られているものと読まれる。作
品構造に密着しての「品定め」女性論の読解はかくのごとくであ
う。

しかし、いま一方、「品定め」女性論の射程を物語全篇に及ぶと
見る立場についても、本文叙述に即しての再吟味がなされなくては
ならない。作品の主軸を形成していく「上の品」の女性—藤壺や紫
上、朝顔や六条御息所など多くの主要人物の物語に、「品定め」女
性論はどう関与機能しているのか。文脈や表現に即してこれを確認
することができのかが、小論の当面の課題なのである。帚木巻頭
本文中(前掲)の「言ひ消たれたまふ咎」は、婉曲に源氏の身にま
つわるスキヤンダルを指して言おうとした叙述であるのは確実とし
ても、それは桐壺巻の物語内容を承けてはいない。いま語り起こそ
うとしている空蟬、夕顔との色恋沙汰を指してもいない(続く叙述
「いとど」からがそれに相当するのである)。文意を解くべくさら
に文脈をたどると、

忍ぶの乱れやと、疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだ

めき目馴れたうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。(同、(1)一五三—五四頁)

と続くが、ここで「忍ぶの乱れ」「うちつけのすきずきしさ」の叙述が読者に連想させるのは伊勢物語初段で、源氏物語作中ではいまだ語り展べられる「中の品」の女との恋物語を示唆するものと解されなくてはならない。これの対比叙述が「あながちにひき違へ心づくしなる」癖「さるまじき御ふるまひ」であるから、それがまさしく「上の品」の女性との源氏のあやにくの恋を指すと解することができる。すなわち「言ひ消たれたまふ咎」である。このように読んで、源氏の高貴な女性たちとのスキヤングラスな恋物語と、そのなかではあくまで余談挿話のスタイルで語られなくてはならなかった「中の品」女性たちとの好色沙汰の物語とが、物語の読者(聞き手)にとっては、前後しつつも併行して享受されていたものと察せられるのである。その具体的な状況として、いわゆる紫上系十七帖の物語が先行し、帚木三帖(これを含む玉鬘系十六帖)が後記挿入されたのかどうかは断定的には論じ難いが、少なくとも藤壺との不義密通の物語について、かなりの程度が読み聞かれていたと推測することが許されるであろう。そのような状況にある読者(聞き手)に対する帚木巻巻頭の草子地¹断りの口調であると読んで妥当なのではあるまいか。そして、そうした文脈のなかに統いて語られる「品定め」女性論が、物語プロットの上での限定枠を守りつつ、同時に作者にある対読者意識においていつでもそれを逸脱超越する位相

で、自在な発展親和力をもつ表現体なのであつたらう。つまり、いまの「品定め」女性論は、「中の品」の階層にある女性、空蟬や夕顔などに対する源氏の好奇心・好色心発動の契機を物語内に用意したものであることは自明として、このややくだけ過ぎた「中の品」女性推奨論が、「上の品」―それも最高貴とすべき藤壺、そのゆかりの紫上、あるいはまた朝顔姫君や六条御息所たちと源氏との「心づくし」の恋物語を、一部すでに読み知らされていた読者に対して語られたものであることに留意すべきなのである。そうした創作過程にあつた作者(語り手)の対読者意識のなかで、「品定め」女性論は自ら前後に長々しい草子地を必要としたであらうし、本題に入ってから最終屈折した諧謔口調を帯びて語られなくてはならなかった。しかも、その主題性においても、「中の品」女性推奨論が物語の本筋としての「上の品」の女性の物語と共存融和するものでなくてはならなかった。無類の理想的主人公光源氏には、あくまでも

上が上を選び出でても、なほあくまじく見えたまふ。(帚木、(1)一六一頁)

先行するイメージが読者(聞き手)にはある。当の源氏自身が、「中の品」女性談義を聞きながら、

君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。これに、足らず、またさし過ぎたることなくのしたまひけるかなとありがたきにも、いとど胸ふたがる。(同、(1)一九〇—一九一頁)

と、藤壺の面影を胸中に追い続けている。右の叙述が、先行の「桐壺」巻のみを承けて施されたものであるとは解しがたく、とりわけ

「いとど」の措辞が読者（聞き手）に理解されるだけの先行藤壺物語の文脈を予想させるところであろう。藤壺に対する切なる思慕を不断に抱き続ける源氏に対して、「中の品」女性への好奇、好色をもしま容認してもよいとする物語読者（聞き手）の心理を迎えとる作者の表現と解することができるのである。

かくて、読者論に立つ「品定め」女性論の読解では、そこでの文脈に密着して帚木三帖（ひいては玉鬘系十六帖）に限定的な作品構造性を読みつつ、同時に他のいわゆる紫上系諸巻の物語にも相俟って関連、併行する、多元的かつ重層的な語りの表現構造を把握することができる。そして、必然的に「品定め」女性論の主題性のありようについても、同断に解せられるのである。この点についていっそう精しい考察を進めるべく、次節において読者論に立つ視座に重ねて、作者論に立つそれをあわせての作品分析を試みたい。

三

見てきたごとく、「品定め」の女性論は、作品構成上の必要や作者（語り手）の対読者意識などさまざまな条件下で語り出されていて、いかにも複雑な構造、表現を示すのではあるが、その中心主題はもはや明確であると考えてさしつかえはない。すなわち、男性の側からする、妻と選ぶべき理想的な女性像追求の論である。その理想像を「中の品」の女性のなかに見出そうとする議論の赴く先に、空蟬や夕顔さらには末摘花、玉鬘らの登場が導かれてくるのは言うまでもないとして、もとより彼女たちは源氏の妻として選ばれる対象ではありえなかつた。源氏にとって理想的な女性¹¹妻は、作中に

すでに明らかな、藤壺の形代紫上である。一見、「品定め」の女性論と紫上の人物像とは直結してはいない。しかし、件の女性論の主題性が紫上系諸巻をも合わせ全篇に及ぶとする見解を重視するならば、両者における相即重合の関係があらためて確認されなくてはならないのである。いささか物語叙述の細部についてそれを検してみたい。

紫上の物語初登場を語る若紫巻は、執筆の先後関係問題はいまはおくとして、帚木巻「品定め」女性論と密接な即応関係にあるものと読まれる。美しい、可憐な少女を垣間見た源氏が感涙にむせぶのは、

限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよく似たてまつれる（若紫、(1)一〇七頁）

かの人の御かはりに、明け暮れ慰めにも見ばや（同、(1)一〇九頁）

との叙述に即して、少女が源氏のひそかに思慕してやまない藤壺と面ざしがよく似ているからであるのは自明として、帚木巻「品定め」場面中の叙述

君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。（前掲）

に、まさしく通底、即応するものであることがわかる。この後、源氏はその藤壺のゆかり、可憐無垢な若紫を掠奪同然のし方で自邸に引き取り、教育を施す。将来、理想の女性、さらには妻に育て上げたい考えから、

女は、心やはらかなるなむよき。（若紫、(1)一三五七頁）

と教えるのだが、この場面は「品定め」の女性論中の

ただひたぶるに兎めきてやはらかならむ人をとかくひきつくり
ひては、などか見ざらむ。心もとなくとも、直しどころあるべ
し。(同、(1)一六四頁)

との談義に脈絡があるものと考えられる。その従順素直な女が、

げに、さし向ひて見むほどは、さて、らうたき方に罪ゆるし
見るべきを、立ち離れて、さるべきことをも言ひやり、をりふ
しにし出でむわざの、あだ事にもまめ事にも、わが心と思ひ得
ることなく、深きいたりなからむはいと口惜しく、(下略)(同、
(1)一六四一六五頁)

いつまでもそのままでは、男にとって残念で頼りないという欠点を
残すことになる(「中の品」の女に見られる一つのケース)。が、若
い紫上は、右叙述の後半に相当する源氏の須磨謫居の間にも、理想
の妻像を明確にするものとして造型されており、

よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。領じたまふ
御庄、御牧よりはじめて、(下略)(須磨、(2)一七六頁)

こうした実務方面のみならず、遠い辺地でわび住まいを続ける源氏
を慰めるべく、

心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて、
(中略)物の色、したまへるさまなどいときよらなり。(同、
(2)一一九二頁)

文にも贈り物にも、深い愛情と配慮がゆきとどいており、作者(語
り手)はここで、紫上の理想的な人格を称賛して、

何ごともらうらうじうものしたまふを思ふさまにて、(同、(1)

一一九二一三頁)

と叙している。ひつきようするに、須磨巻前後からその造型を確かなものにする紫上の理想的妻像は、反措定の形をとりながらも、たしかに「品定め」女性論の主題性に即応整合する文脈のうちに型どられていくことがわかるのである。

紫上の理想的人物像と「品定め」女性論との深い相即、重合の關係を示す、いま一つの確かな文脈・表現を押さえてみよう。若紫巻頭に近い条、源氏が少女紫上を垣間見る直前の場面で、気分を紛らわすための春山遊歩に出かけた源氏は、供人長清から前播磨国司明石入道とその娘の話を開かされる。父入道は娘を京の高貴の人と結婚させようと、それだけを住吉明神に祈って、娘に対しても

もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違
はば、海に入りぬ。(若紫、(1)一〇四頁)

と訓じており、また、

代々の国の司など、用意ごとにして、さる心ばへ見すなれど、
さらにうけひかず。(同、(1)一〇三頁)

と世間を拒む「世のひがもの」であるとか。ただし、娘は
けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。(同、(1)一〇

三頁)

その「心高さ苦し」い、魅力的な女性らしいので、源氏の興味を強くひきつける対象として、その片鱗だけが伺い知られるところである。後の明石巻で、流離の貴公子と出会い、契りを交わし、以後苦悩多き己が「身のほど」「宿世」を認識、徹底的な自己卑下と忍従とによって世に処し生きぬいていく明石の君その人であるが、彼女

がこの若紫巻に、短いエピソード中の人物としてではあれ、はやくも登場する物語内必然―その論理ないし意味とは何であろうか。小説の立場からこれを再吟味してみよう。

若紫巻における明石親娘の風評話題は、単にこの場限りのエピソードとして語られたものではなく、後の明石巻以降の物語展開の伏線描写として、作者によつてきわめて用意周到に叙せられたものと解されよう。なぜなら、ここでのエピソード中の父入道(母(尼)君、娘本人それぞれの人物像は)はまだ素形のままであるが、明石巻以降の物語においてその内面までも分厚く造型されるそれぞれの人間像―その状況や思惟世界すべてとあまりにも正確に整合しており、鈴木日出男氏の論説どおり、

物語の全体から明石一族の物語を抽出してみるかぎり、受領層に下降した一門の娘明石の君が光源氏と結ばれ、そのことによつて一門の再興が果たされるという大筋は、初めから作者の念頭にあつたとみるほうが穩当ではあるまいか。

と考えられる。すなわち、若紫巻執筆の時点で、後の須磨・明石巻以後の物語までもが作者に構想されていた、とされるのである。ただし、ここで問題となるのは明石君の年令のこと。明石巻で推定される十八才から逆算すると、若紫巻での彼女は九才となり、「代々の国の司」が求婚する年令の女性とは考えにくいことになる。表現の細部にこだわればこうした矛盾を散見するものの(作中人物の年令については、他にも六条御息所、紫上などにかかわる叙述中に前後不整合を読むところがある)、物語の基本構想を論ずる上で、若紫巻―明石巻の承接連関の確かさは認められて然るべきであろう。

一件のエピソードが持つ構想上の重みを考慮するとき、若紫巻は紫上の初登場を語り出しつつ、同時に明石君のそれをも併せ語るものであると了解される。二人は、物語世界において当初から対個人物として位置づけられているのである。この点について、吉岡曠氏が考論されるに、^(注19)

紫上が初登場する同じ巻で、何の理由もなく明石君の登場が予告されていることは、この二人が最初から一対の人物として作者に意識されていたことを物語っている(中略)紫上と明石君は、やがて物語上に実現する理想的現実であつた

のである。まさしく正鵠を射た卓論と肯んぜられる。そして、この紫上―明石君一対の物語構想を確認した上で、帯木巻「品定め」の女性論が作中における明石君造型にどう及んでいるかが検証されなくてはならないであろう。物語の文脈、表現に即してみよう。

帯木巻「品定め」場面に見られる次のごとき叙述
中の品になむ、人の心々おのがじしの立てたるおもむきも見えて、(帯木、(1)―五八頁)

受領といひて、他の國の事にかかづらひ営みて品定まりたる中にも、(同、五九頁)

思ひやることなることなき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたることわざもゆゑなからず見えたらむ、(同、六一頁)

すべて、心に知らむことをも知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける。(同、九〇頁)

などに、「かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる」。「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべる」(若紫、(1)―(2)―(3)頁)、さらに「身のほど知られて、いとほるかにぞ思ひ」つつも「延喜の御手より弾き伝へたる」箏の琴を「あやしうまねぶ者」、「なかなかやむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなし」(明石、(2)―(3)―(4)頁) そのすぐれた人格性をもって紫上と共に源氏の栄華を支え続けていく明石君の原像を読みつないでいくことが可能なのである。「品定め」における「中の品」女性推奨論は、直截に、明石君サクセスストーリーに通底しているものと解されてよい。もちろん、両物語の關係構造を単線直結型のものとして把えるべきではないが、その根基にある「品定め」女性論の主題性は確認されなくてはならないであろう。

以上、「品定め」女性論の主題性が、後の紫上物語、明石君物語にも遠く深く作用しているものであることを物語本文に即して読みおさえてみた。

四

小考の結論とするところを要説したい。主題論の方法として、これまで作者論に立つてする場合が一般的であったが、近来はむしろ読者論に立つてする場合が多くなってきている。が、それは多様な主題論成立の可能性を増大するすぐれた成果をもたらしつつ、同時に作品世界における統一原理、思想性をややもすれば見失わせる危うさをも内在させて、なお確実十全な方法たりえてはいない。ひつきょうは、

主題論といった読者の主観に大きく関わって追求される分野では、そうした見解の残るところのあるのは当然でもあるが、また、共通の理解に至り得るはずの問題も、いまだ多く残されている。

のである。こうした課題を克服すべく、さらに方法論そのものが追求されなくてはならないのであるが、再び作品そのものの側に立脚する主題論のあり方の基本を問いなおして、小論は作品論に立つ源氏物語主題を試みたのである。その方法とは、何よりも作品の構造、その文脈や叙述に密着しつつ、従来の作者論あるいは読者論に立つ方法、その達成をも統合包摂して行われる、より確かな作品分析に基くものである。その実践作業として、小論は帯木卷「雨夜の品定め」女性論の主題論的考察を試みた次第なのであるが、その要点とするところをまとめるならば、次のごとくとなろう。

「品定め」女性論は、物語の構造上、たしかに帯木三帖(あるいはこれを含む玉鬘系十六帖)の枠づけのもとに語られてはきている。その主題性についても、直接的に作用する範囲とはそれら諸巻の女性人物についての物語ではあるう。しかし、そうした作品の構造化、主題性が、作者における対読者意識に強く支配されて形成展開されたものであることを読み知るとき、ここでの語り方法は一元的限定的ではなく、多元的重層的なものとなっていたはずである。なぜなら、物語の読者(聞き手)たちは、帯木卷の「品定め」に先んじて、紫上系諸巻の物語のかんりの部分について既読、あるいは享受中のところだったからである。そのような物語享受者たちに十分容認鑑賞され得る理想女性談義は、いかにも屈折多い諧謔文体による

「中の品」推奨論でありつつも、同時に必然的に「上が上の品」女性憧憬、称揚の論にも通じていなくてはならなかった。物語はいま、構造的にも主題的にも、まさしく両義の糸で紡ぎ織りなされるべく遠大な構想のもとに展開しつつあり、その端緒をなすのが若紫巻での紫上と明石君の対偶の登場であつたらう。ひつきょう、この対偶をめぐってする作者の往還または螺旋の型の精神運動として、「品定め」の女性論、また以降の多くの女性人物の物語が構想されていくのである。

かくて、「品定め」女性論の主題性は、その射程が物語全篇、あらゆる主要女性人物像に及んで作用するものと考えられることができる。ならば、その主題性の内実とは何か。それは、日向氏の高論に学んで、

作者にとつて繰り返し問い返さねばならない女の生き方、女の人生の問題（中略）、作者にとつて持続的な問い^{注20}

と考えるに、至当であらう。その「女の生き方」の問題を、当時の社会現実において最も真摯に切実に生きていたのは「中の品」の女性たちであることは作者が信じて疑わなところであつたのだが、大方上流貴顕の娘たちを讀者とする物語作品にあって、それをストレートに主張することはやはり躊躇われる状況が予想され得る。ここで作者のおびただしき自己韜晦がはじめられつつ、しかしながら平安貴族女性の不安と苦悩に満ちた人生のありようは、作中人物の出自自身を超越して共通のものとして確実に形象化されていったのではないだろうか。作者における對讀者意識を視座にとり込んで、ささやかな試論である。これをワン・ステップに、さらに源氏物語全

篇にわたる主題論へ歩を進めることができるよう、読みを深めてゆきたい。

注(1) 仲田庸幸『源氏物語の文芸的研究』（風間書房刊、昭37）ほか。

(2) 武田宗俊『源氏物語の研究』（岩波書店刊、昭29）ほか。

(3) 淵江文也『柏木の不審―源氏物語の方法』（人文論集）一の二、昭40

(4) 長谷川政春『主題』（秋山虔編『源氏物語事典』学燈社刊、平元所収）

(5) ロラン・バルト『物語の構造分析』（みすず書房刊、一九七九年）

(6) 注(4)に同じ。

(7) 秋山虔『源氏物語の主題―主人公への視角から』（高橋亨 久保朝孝編『新講源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社刊、一九九五年）

一九九五年）

(8) 百川敬仁『内なる宣長』（東京大学出版会刊、一九八七年）

(9) 秋山虔『源氏物語―作品と作中人物』（源氏物語必携Ⅱ）学燈社刊、一九八六年所収）

(10) 阿部好臣『主題』（秋山虔編『源氏物語必携Ⅱ』学燈社刊、一九八六年）

(11) 藤岡作太郎『国文学全史2』岩波書店刊、明38）

(12) 島津久基『対訳源氏物語講話巻一』（中興館刊、昭5）

(13) 阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会刊、一九五九年）

(14) 注(13)に同じ。

(15) 室伏信助『源氏物語の女性論』（山岸徳平・岡一男編『源氏物語

講座』第五卷、有精堂、昭46) ほか。

(16) 西郷信綱『源氏物語を読むために』(平凡社刊、一九八三年)

(17) 鈴木一雄「雨夜の品定め」論―『源氏物語』の総序でありうることについて―』『十文字女子短期大学研究紀要25、一九九四、九)

(18) 日向一雅「雨夜の品定め(2)」(講座源氏物語の世界』第一集、有斐閣刊、昭55所収)

(19) 吉岡曠「紫上系十七帖の構想」(「むらさき」第六輯、昭42、笠間書院刊『源氏物語論』昭47所収)

(20) 日向一雅「帚木」三帖の主題」(鈴木日出男 増田繁夫 伊井春樹編『源氏物語研究集成』第一卷、風間書房刊、平10所収)

なお、テキストには『日本古典文学全集源氏物語(新編)(1)』

(6)『(小学館刊)』を用い、本文引用にあたっては、源氏物語巻名、全集巻数、頁数を記入した。記して謝し申したい。